空を翔るツバサ

海無 七河

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
空を翔るツバサ

【Ｎコード】
Ｎ８５５０Ｙ

【作者名】
海無　七河

【あらすじ】
宇宙からやってきた生命体『トロイ』との激戦区である第三大陸。そこにある学園に通う少年は、翼を持ち、空を飛ぶ少女に出会い、拉致される。
彼の連れていかれた先は、極一部の人間しか知らない組織『ツバサ』だった。

そこで彼は『トロイ』に関する重大な秘密を知る。

Ｆｌｉｇｈｔ　１　空翔る少女（前書き）

もちろんこの物語はフィクションです。

それでは行きます！

↓Ｒｅａｄｙ　Ｆｌｉｇｈｔ！

Flight 1 空翔る少女

今から二十年ほど前、五つの大きな大陸を持つ惑星に新たな生命体が現れた。

虫のような外見の奴らは宇宙(そら)からやってきて、特殊な光線で人間を、建物を―全てを焼き払った。

人間はヤツらに『トロイ』の名をつけた。

今もなお、戦いは続き、数年ほど前からその激戦区は、科学文明が発達した第三大陸に移っていた。

×＊××＊××＊××＊×

時刻は昼の十二時二十三分。

僕は空き教室でノートパソコンを見ていた。

窓の外には人を器用に避けて走り回る影。

ボーっとそれを見ていると、ノイズ音と共にパソコンから声が流れてきた。

『拓海(たくみ)、東は使えないぞ。どうする？』

窓から見えた走り回る人影―竜騎(りゅうき)の声だ。

僕は少し考えてから、

「上からは？虎月（こげつ）、行ってたっけ？」

『おぉ！それがあったか・・・行ってみる！』

そんな返事が返ってきて通信は切れた。

きっと成功かな。

そんなことを思いながら十五分くらい待っていると、

「ただいま～っと。今日の戦利品だぞ」

竜騎ともう一人―虎月が教室に入ってきた。

二人は僕の前にランチボックスが三つ入った袋を置いた。

そう、これが僕達の狙ってた物。

この学園では三ヶ月に一度、学食で限定十食特別メニューが販売される。

求める生徒数は約百人。

僕達もその中の一部だ。

運動は得意じゃない僕は二人に走るのを任せて、こうして指示を別場所から出していた。

「それにしても、拓海が指示するようになってから勝率が上がる上

がる！」

「そうだな。今じゃ俺らも学園中の有名人だ」

竜騎と虎月が戦利品を食べながらそう言った。

その時の僕は「そんなことないよ」と言うだけだった。

「有名人」

この言葉が僕の運命を左右するなんてその時は知らなかったんだ。

×＊××＊××＊××＊×

「はい、次を竜騎＝アレルヤ」

午後の最後の授業。

「え～・・・あ～・・・わかりません！」

弾かれたように立ち上がった竜騎は大きな声でそう言った。

先生は何も言わず―否、心なしか呆れたような顔で教室内を見回し、

「・・・（ん？）」

「では代わりに拓海＝エイリアス」

目が合った僕を指名した。

「はい」

電子黒板に歩み寄り、答えを書き込む。

「正解。では今日はここまで」

ちょうど時間が終わり、先生は教室を出ていった。

「は～・・・俺、やっぱ歴史嫌いだ」

先生が教室から出た後、後ろの席の竜騎がつぶやいた。

「じゃあ、どうして歴史科なんか入ったの？」

第三大陸学園には三つの科がある。

歴史科―この世界の大陸史そして『トロイ襲撃』を中心とした宇宙史を学ぶ。

芸術科―美術や音楽のエキスパートを育成する。

そして航空科―その名の通り、パイロットや技師、通信士など航空に関わる人材の育成をする。

「だってよ、うちの親も兄弟もみんな第三大陸学園の出身だからさ・・・」

竜騎の両親はパイロットと整備士。

二人の兄は芸術科と航空科にいる。

「そうじゃなくて、拓海が言ってるのはどうして航空科や芸術科にしなかったのかってこと」

いつの間にか虎月が僕の隣に座っていた。

「・・・俺に入試をパスできるほどの芸術的センスと技術が備わってると思うか？」

「思わないな」

虎月がバッサリ切り捨てる。

ヒドいとは思うけど、僕もそう思ってたから黙っておこう。

「ましてや、厳しいと噂の航空科に俺が入るわきゃねーだろっ！」

竜騎はそう言って机をバンッ、と叩いた。

航空科はパイロットや技師を育成するだけあって特殊なカリキュラムが多い。

ついて行けなくなって中退したり転科する人も少なくない。

「名前は『竜』の『騎』士、で勇ましいのにな」

「やかましい！」

二人が取っ組み合いを始めてしまったので、僕は巻き込まれないようにそっと、窓側に寄った。

外では何台もの飛行機が空を飛んでいた。

あれは全部航空科の物。

初めて学園に来た時は驚いたけど、今はすっかり慣れてしまった。

「あれ・・・？」

毎日見ているせいか、航空科じゃなくても生徒達は飛行機の見分けがつくようになっていた。

いくつかの中型戦闘機と小型旅客機の中に一つ、見慣れない形を見つけた。

明らかに他の物よりサイズが小さい。

それに、何かが太陽の光を反射してキラキラ光っている。

戦闘機は光らないような塗装をされているし、旅客機もそこまで光を反射しない。

あれは何だ・・・？

トロイ？

いや、違う。

あれは教科書で見たトロイじゃない。

僕は思わず窓を開け、身を乗り出した。

風が教室内に入ってくる。

いつの間にか竜騎と虎月も手を止め、窓の外を見ていた。

クラス中が静かだった。

その影はだんだんはっきりしてきて・・・。

「え・・・！」

信じられない。

「マジかよ」

「えっ」

教室内が驚きの声で満ちる。

理由はその影にあった。

人が空を飛んでいる。

ガラスのように透明な翼を持つ、女の子がこちらに向かってくる。

女の子は僕に向かって手を伸ばした。

眩しい蒼の瞳で見つめてくる。

その姿に吸い寄せられるかのように、気づけば僕も彼女に手を伸ばしていた。

「あなたが、拓海＝エイリアス？」

僕の手を取り、強気そうな女の子は真っ直ぐに見て、そう訊いた。

呆然としていた僕は我にかえって、

「え！？・・・あ、うん」

とわけのわからない返事をした。

女の子は満足そうに笑って、

「今から私達と一緒に来てちょうだい！」

そんなことを言った。

「・・・・え～と・・・『達』？」

いや、そこじゃないだろ自分。

発した言葉はそんなコメントをつけたくなるけど・・・。

何だこれは。

どうしてこうなってる？

誰か説明して！

混乱していた僕はそんなことしか言えなかったのだ。

「そんなわけで・・・えいっ！」

「え？」

何がそんなわけ？

そう訊こうとした瞬間だった。

腕を強い力で引っ張られ、

体が宙を舞った。

・・・誰の？

僕のだ。

「うわぁぁぁぁぁぁ！」

どうやら女の子に投げられたみたいだ。

って、冷静な分析してる場合じゃない！

情けない悲鳴を上げながら僕は外に飛び出す。

えっちょっと待っ・・・！

落ちる、落ちるから！

重力に従って体が落ちていく中、思わず目を閉じると、

「おわっ・・・！いきなり投げるな！」

再び腕を掴まれ、引っ張られ、投げられる。

「うぐっ・・・！？」

体が固い場所にぶつかった。

扱い雑だなぁ。

そんなことを思って目を開けると、僕は航空科所有の小型飛行機に乗っていた。

「え～と・・・？」

状況がわからない・・・。

立ち尽くしていると、やたら背が高い男子が、

「悪いな。突然」

苦笑いで話しかけてきた。

「俺は二年の那千(なち)っていうんだが、お前は？」

「拓海ですけど・・・これは一体？」

すると、開きっ放しだった飛行機のドアからあの透明な翼が飛び込んできた。

女の子は僕を見るなり、

「『ツバサ』にようこそ！」

そんなことを言った。

Ｆｌｉｇｈｔ　１　空翔る少女（後書き）

＊後書き劇場＊

竜騎「大変だ！拓海が拉致られちまった！」

虎月「でもあの子、誰だったんだ・・・？」

竜騎「まさか拓海のカノジョ！？」

虎月「それは無いと思う・・・でもなんか秘密がありそうだ」

竜騎「秘密？」

虎月「そんなわけで次回、
『Ｆｌｉｇｈｔ　２　ツバサと翼』
お楽しみに」

竜騎「っておい！」

＊×＊×＊×＊×＊

そんなわけではじめましてｏｒいつもお世話になってます。
海無七河です。

新連載はＳＦにしてみました。

楽しんでいただけたら幸いです。

個人的なお気に入りは那千と虎月（笑）

ではどうぞこれからもよろしくお願いします！

Ｆｌｉｇｈｔ　２　ツバサと翼（前書き）

＋前回までの話＋

空を飛ぶ少女に拉致られた拓海。
着いた先は・・・・

↓Ｒｅａｄｙ　Ｆｌｉｇｈｔ！

Flight 2 ツバサと翼

「『ツバサ』にようこそ！」

少女はそんなことを言った。

「は？」

「お前なぁ・・・」

額に手を当て、那千さんは小さくつぶやいてから、

「こいつはお前と同じ一年の斎（いつき）。航空科パイロット部所属・・一応」

斎と呼ばれた子の着ている服は航空科のつなぎ。

でも・・・。

「一応・・・・？」

「それはこれから説明するわ」

飛行機が地面に近づく。

二人の後について外に出ると、僕がさっきまでいた歴史科の校舎はかなり遠くに見えた。

「おい、置いてくぞ」

「えっ・・・待ってください！」

二人の背中を見ていないと、自分はどこにいるかわからない。

そんなくらい、航空科の校舎は入り組んでいた。

×＊××＊××＊××＊×

五分くらい経っただろうか。

斎さんと那千さんの足が一つのドアの前で止まった。

他のドアと違う、見るからに頑丈そうなドアだ。

斎さんがゆっくりと、ドアを開けた。

そこには、

「・・・何、これ・・・」

ちょっと薄暗い室内には大型のモニターが三方の壁に付いている。

その前にはたくさんのボタンやスイッチが光るキーボード。

その前には数人の人が座って、画面を見つめている。

部屋の中央には大きな白の円卓があった。

「・・・・」

日常生活ではお目にかかられないものばかり。
僕はボケーッと突っ立っているしかなかった。
「驚いた？」
斎さんが満面の笑みで顔を覗き込んでくる。
「驚きますよ・・・ここは一体・・・？」
僕の質問に答えたのは、
「それにはちょっと長い説明が必要になるな」
那千さんのそんな言葉だった。
×＊××＊××＊××＊××
今から二十年ほど前、この惑星に新たな生命体が第一大陸で確認された。
虫のような姿をしたヤツらは、顔―額のあたりからコンクリートをも貫く光線を放った。
大陸中が混乱し、犠牲者は数万人。
人間はこの生命体を「トロイ」と名付け、研究を進めていく。
それから八年後―今から十二年前、人間は対トロイ用の武器と、光

線に耐えられる特殊素材を開発した。
それと同時にヤツらは再びやってきた。
「・・・とここら辺は歴史科なら授業でやってたか」
「はい」
「じゃあ続けるぞ」

武器と飛行機を駆使して人間は戦うが、戦況はよくならない。
ところが、ある兵士が一体のトロイの腹の中心を攻撃すると、そのトロイは石になって砕けて消えた。
これが弱点だ。
しかし、攻撃するには戦闘機では的が小さすぎる。
そこで新たに生まれたのが、
「対トロイ歩兵だ」
「それは見たことあります。街をよく巡回していますから」
すると那千さんは斎さんを振り返って、
「じゃあ、歩兵はコレを持ってるか？」

―カツン

円卓の横に置いてあった翼を軽く叩いた。

答えはもちろん、

「持ってない・・・です」

「それがこの続きだ」

歩兵の活躍により戦況は少し良くなったが、何千体のトロイを倒すにはまだ足りなかった。

ヤツらは空を飛ぶ。

では、歩兵も飛べばいいじゃないか。

「それで特殊素材を使ってこの翼が開発されて、新しく空兵と呼ばれる兵士が現れた」

やっとわかった・・・でもこの話だと・・・。

「まるで、斎さんが空兵みたいな感じだ」

「お、さすが。その通りだ」

へ？

斎さんを見るけど笑っているだけで何も言わない。

「ここは世界初の空兵が所属する大陸軍特殊戦闘部―通称『ツバサ』の司令部だ」

「ツバサ・・・」

まずい。

頭が・・・追いついていかない！

「大丈夫？」

斎さんが話しかけてくるけど・・・。

「・・・ごめん・・・全然わかりません」

「だよな。突然言われたってな」

那千さんは同情的な視線で僕を見る。

「とりあえず・・・何で、僕がここに・・・？」

「食堂の特別ランチ」

「は？」

斎さんは僕の前に立つと、

「『昼休みの戦』連勝記録への陰の暗躍者、歴史科一年、拓海＝エイリアス。ちなみに入学試験の成績はトップクラス。運動はあんまりだけど・・・」

ビシッと僕を指差した。

「私達ツバサは、あなたの作戦を立て、兵士を動かす能力に可能性を感じるわ！」

「いや、兵士じゃなくて一般生徒だ」

那千さんのツッコミも耳に入っていない。

「ていうか何でそんなこと！？」

今にも踊り出しそうな斎さんを横目に、

「当たり前だろ。連勝記録を持つ一年なんて史上初だ。有名にもなるぞ」

「ついでに成績一位はどの科でも有名人になれるわよ」

言った那千さんと斎さんの言葉に、

昼間に聞いた竜騎の話を思い出す。

有名って本当だったんだ・・・！

「そんなわけで、あなたにはツバサに入隊してもらうわ！」

「いやいや、待って！そんな突然・・・ていうか本当に僕でいいんですか？」

人違いじゃなくて・・・？

混乱とそんな心配で、慌てて口を開く。

でも斎さんは、

「あくまでも可能性があるって話。役にたちそうになかったら雑用をしてもらうか、脱退してもらうわ」

勝手すぎる！

那千さんは、

「無理しなくていいぞ」

って言ってくれるけど・・・。

僕がものすごく迷っていた、そんな時だった。

『こちら、大陸軍。こちら、大陸軍。第三大陸学園西方にトロイを確認。ツバサは至急、出動準備を開始してください』

突然けたたましいサイレンの音と、そんな放送が室内に響いた。

まさか・・・！

「出動みたいね。どう、見学してく？」

斎さんはそれだけ言い残すと走って部屋を出て行く。

那千さんと僕が残された。

「ま、ちょっと見ていけよ」

そう言って僕を巨大モニターの前に連れて行く。

「那千さんは行かないんですか？」

「今回はそんな大規模戦じゃなさそうだし、俺にあの翼は使えないからな」

×＊××＊××＊××＊×

突然モニターが明るくなって、画面上に外の画像と地図が映る。

それと同時に数人の人間が部屋に入って来て、たくさんのスイッチやボタンを操作しだす。

『パワーエナジー補給完了。出動準備完了しました。パイロットは出動態勢に入ってください』

『了解』

何が何だかわからないままに事は進んでいく。

そして、スピーカーから斎さんの生き生きとした声が聞こえてきた。

『斎＝フレンチェ、出動します！』

画面の向こうで何かが光る。

翼を広げ、真っ直ぐにトロイへと向かう斎さんだ。

「これから斎はトロイに接触し、ヤツらが弱点を晒した時を狙う」

那千さんは画面を見つめたまま解説してくれた。

『トロイは三体。全て小型の物です』

「よし、いつも通りに落ち着いていけ！」

那千さんの指令を聞き、斎さんは一瞬速度を落とすと、

『行きます！』

次の瞬間、すごいスピードでトロイに近づく。

トロイの赤色の目が斎さんをとらえた。

ヒュンっ

何人もの命を奪う光線が次々と放たれる中、斎さんはダンスをしているかのように翼をきらめかせて飛んでいる。

「さて、何か気づいた事は？」

食い入るように画面を見ていると、突然那千さんがそう言った。

気づいた事・・・？

もう一度よく、トロイの様子を見る。

斎さんが右に行けば体を僅かに左に向け、左に行けば右に向け・・・。

「弱点を正面にしていない・・・！」

「その通り。ヤツらは本能的に弱点を隠している・・・つまり、それより早く斎が動けばいい」

「でも、今もかなりのスピードで動いてますよね・・・」

既に僕の目には追えないぐらいのスピードでトロイと斎さんは動いている。

「戦闘機には無理だな・・・・でもそれができるのが空兵―斎だ」

Ｆｌｉｇｈｔ　２　ツバサと翼（後書き）

＊後書き劇場＊

拓海「これから斎さんはどうなるんですか！？」

那千「まあ落ち着け・・・斎はこれから変形する」

拓海「変形！？」

那千「そうだ。翼が第二形態に変わり、斎は巨大ロボットへと変化する・・・って冗談だからな」

拓海「ロボットか・・・凄い・・・！第三話が楽しみです！」

那千「おーい、冗談だぞ・・・聞いてねぇな」

拓海君は純粋な子。

そんなわけで第二話をお送りしました。

斎さんの華麗な活躍・・・うまく書けてない（笑）

脳内補完の方をお願いします（ヲイ）

では次回も是非ご覧下さい。

Ｆｌｉｇｈｔ　３　金の紋章（前書き）

行っきまーす！

Ｒｅａｄｙ　Ｆｌｉｇｈｔ！

Flight　3　金の紋章

『そろそろ行きたいんだけど！』

スピーカーから斎さんの声が聞こえる。

「そうだな・・・エナジーも溜まったし。いいぞ！」

那千さんの指示にスピーカーの向こうで斎さんが笑う気配がした。

『じゃあ・・・！』

その瞬間、

「え！？」

僕の口から驚いた声が出る。

消えた。

突然、画面上から斎さんが消えた・・・・！

「え！？斎さんは！？」

思わず那千さんに詰め寄ると、

「落ち着けって・・・別に斎は消えちゃいない」

でも・・・。

「高速で移動しただけだ」

「あっ・・・」

改めて画面を見ると、トロイも消えたターゲットを捜し、視線を彷徨わせている。

『エナジーパック装填完了！突撃っ！』

僕たちの目の前を翼が翔る。

―ゴォッ

そんな轟音が聞こえそうな、凄まじいスピードだった。

斎さんはトロイの頭上に現れた。

トロイはまだ気付いていない。

手の中の特殊レーザー銃が火を噴いた。

二本の光の一つはトロイのハエのような羽に。

「トロイの動きを封じた・・・？」

「そうだ。これでトロイの動きは格段に鈍くなる」

もう一つの光は、的確に腹の中心を捉えた。

―・・・・！

空気を切り裂くようなトロイのかん高い鳴き声が響いた。

トロイは石になり、砕け散った。

『一体撃破！』

斎さんは残りの二体に近づく。

でも、

「トロイが退いてく・・・」

トロイは攻撃をすること無く、退いていった。

「何だったんだ・・・？」

「多分リーダーが撃たれたから退いたんだろう・・・斎、お疲れ」

『帰還します』

画面から斎さんの姿が消える。

那千さんが僕を見た。

「どうだ？これがツバサの戦いだ」

入るか？

那千さんの目がそう問いかける。
僕が役に立てるなんて、思ってない。
でも、興味があった。
トロイという生き物に。
ツバサという存在に。
空を翔る翼に。
だから、迷わなかった。
「入ります。僕の力がどのくらい役に立てるかわからないけど・・・」
「そうか・・・ほいっ」
「うわっ」
金色の物体が宙を舞い、手の中に収まる。
見ると、
「バッジ・・・？」
「それは大陸軍の階級章だ。ま、この隊に階級なんてあって無いようなもんだけどな」

「階級章・・・」

剣の模様が刻まれた階級章を裏返せば、

【一等兵】

と刻まれている。

もう、あとには戻れない。

「よろしくお願いします！」

こうして僕は、大陸軍特殊戦闘部『ツバサ』の一員となった。

×＊××＊××＊××＊×

「・・・・で、ここが格納庫」

ツバサの一員となった僕は、帰還した斎さんに航空科を案内してもらっていた。

それにしても・・・。

斎さん、タフだなぁ。

さっきまでトロイと戦ってたとは思えない元気さに、僕は心の中でそう思った。

「璃亜（りあ）さん、いますか～？」

飛行機の間を進みながら、斎さんが誰かを呼ぶ。

「いるよ～！今手が離せないんだけどね～！」

叫び声が返ってきた。

「ということは整備中ね・・・」

またしばらく歩き、羽の部分が分解されている飛行機の前で斎さんは止まった。

「はいよ、今出る・・・って斎か」

汚れで真っ黒なつなぎを着た女の人が現れた。

「拓海、こちら璃亜さん。三年生で、整備士なの」

「もしかして、ツバサの新入りかい？」

「はい！拓海といいます」

「そうか。あたしは璃亜。ツバサの整備士をやってるんだ。よろしく」

×＊××＊××＊××＊×

そして、僕たちは司令部に戻って来た。

「お～拓海、ちょっといいか？」

「何ですか？」

那千さんは分厚い紙の束を僕に渡しながら、

「早速だけど明日の放課後からこっちこれるか？」

「航空科にですか？多分大丈夫だと思いますけど・・・」

補習は必要無いし、放課後は暇だ。

「そんじゃ頼む。あと、できるだけコレ、読んどいてくれ」

コレって・・・コレ？

さっき渡された紙の束に視線を向ける。

「ざっと百ページはありますよね・・・」

鞄に束をしまい込み、僕は歴史科の校舎に足を向けた。

×＊×＊×＊×＊×＊×

「『トロイは街にあるセンサーで感知し、軍本部に情報が送られる。基本的に小規模戦の場合は歩兵もしくは空兵、大規模戦の場合は加えて戦闘機数台が出動する』

・・・ふう」

貰った資料を机に置き、一息つく。

膨大な紙の束のやっと半分を読み終わった。
資料にはトロイや武器、隊についてなどが書かれていた。
その中にはあの翼の解説もついていた。
人体着脱式飛行装置【ＨＦ－０１】。
重量五？。
最大全長約三メートル。
箱のような装置をリュックのように背負うと、翼が開き、飛行可能になる。
翼は特殊素材製でトロイの攻撃を跳ね返すことができる。
こうしてみるとあの翼は今、この世にある対トロイ科学の結晶のような物だった。
「僕はどうすればいいんだろう・・・・」
この未知の世界で。
×＊××＊××＊××＊×
「こんにちは～・・・」
放課後、何度も迷いながらツバサの司令部に着いた。

「おー。早速だがこっち来てくれ」

ノートパソコンの前に座る那千さんに呼ばれた。

今日は昨日より人が少ない気がする・・・。

「今日は斎さんは？」

「飛行訓練だ。それより、今日からお前にはこれをやってもらう」

そう言って画面を指される。

画面には、

「シュミレーション？」

「そうだ。これからトロイとの大規模戦を想定したシュミレーションをしてもらう」

パソコンに映っているのは自軍の兵士、戦闘機の駒。

そして、トロイ。

僕は兵士と戦闘機を動かし、全てのトロイを倒せばいいらしい。

「最低でも自軍の損害ナシ、二十回で撃破な」

「わかりました」

スタートをクリックすると、画面が動き出した。

―五分後。

「ああっ！」

僕の情けない声が司令部に響いた。

画面には【ＬＯＳＳ】の文字が・・・。

「なんだよ。せめて十分は粘れよ」

那千さんはそう言うけど・・・。

これ・・・難しい！

あの昼休みとは違う。

敵の動きが予測できない。

これだ、と思う作戦も潰される。

気がつけば自軍の兵士の数は０に近かった。

「・・・何か、難しくないですか」

「当たり前だ。これは過去の大規模戦を元に作ったシュミレーションだからな」

これが・・・トロイとの戦い・・・。

甘かった。

これは遊びじゃない。

それを僕はわかってなかったんだ。

×＊××＊××＊××＊×

司令部を出て、廊下を歩く。

外では色々な種類の飛行機が飛んでいる。

もちろん戦闘機の姿も。

あの飛行機も戦うんだ。

「僕は・・・」

もう逃げることはできない。

でも・・・。

正直言って自信が無い。

僕が軍隊を指揮をすることに。

トロイと戦うことに。

「・・・！」

翼が夕焼けに反射し、虹色の光が窓から差し込む。

斎さんが飛んでいた。

ゆっくりスピードを上げ、急上昇。

そして急降下。

一回転して、急旋回。

舞うように、優雅に飛び回る。

「そうだ・・・僕は逃げられない」

この翼に魅せられてこの隊に入った。

それなら、翼に最高の戦いをさせるのが僕の役目だ！

僕は来た道を戻って、司令部のドアを開けた。

Ｆｌｉｇｈｔ　３　金の紋章（後書き）

＊後書き劇場＊

拓海「そういえば斎さんって力持ちなんだね」

斎「・・・・・え？」

拓海「五？の翼を背負ってあんな風に空を飛び回るなんて・・・・！凄い力だよ！」

斎「・・・そう・・・・・・それはどーも」

拓海「えっ！？何でどっか行っちゃうの！？」

拓海は女心を知るべきだ！

そんなわけで第三話です。

気づけば那千の出番が斎より多くなってるミステリー。

気をつけよう・・・・。

次回もぜひご覧下さい！

Ｆｌｉｇｈｔ　４　未知からの問いかけ（前書き）

拓海もだいぶツバサに馴染んできました。

用意はいいですか？

Ｒｅａｄｙ　Ｆｌｉｇｈｔ！↓

Ｆｌｉｇｈｔ　４　未知からの問いかけ

「さすがに重いな・・・」

ダンボール箱を自室の机に置く。

中に入ってるのは那千さんに借りた資料。

その中からＤＶＤを取り出し、ノートパソコンに入れる。

紙束を片手に、僕は画面に神経を向けた。

資料―それは過去の対トロイ戦の記録。

何度も、何度もＤＶＤを見てトロイの動きを頭にたたき込む。

単体だと弱点の守りに徹する・・・複数だと・・・・？

一本のＤＶＤが終わると、次のＤＶＤを入れる。

また資料を見る。

こうして夜は更けていった・・・。

×＊××＊××＊××

「ふわ・・・・」

「拓海が珍しく眠そうだぞ！？」

翌朝、歴史科の教室。

あくびをした僕を見て、竜騎はそう言った。

「本当だな・・・どうかしたのか？」

虎月も不思議そうに訊いてくる。

「ん・・・ちょっと寝不足・・・・」

徹夜で全てのＤＶＤと資料を見たせいだ・・・・。

うわ・・・キツい・・・。

「最近放課後も忙しそうだしな～」

竜騎や虎月は僕が航空科に軍に入っていることを知らない。

そしてこれからも言うつもりは無い。

「やばっ・・・・授業始まる！」

チャイムと共に先生が入ってきて、竜騎と虎月は席に戻った。

それにしても・・・眠いなぁ。

授業中・・・起きていられるだろうか。

―キーンコーン

チャイムが響く。

「まったく・・・拓海が居眠りなんて珍しいな」

「すみません・・・」

案の定僕は寝ていたようで、職員室に呼び出されたのだった。

×＊××＊××＊××＊××

「こんにちはー」

放課後、昨日のように僕は司令部に入った。

「こんにちは、拓海」

「あ、斎さん。今日は訓練じゃないの？」

司令部には斎さんだけしか居なかった。

「翼のメンテ中。暇だし、飛行機でも飛ばしてこようかしら・・・」

サラッと凄いことを言うなぁ・・・。

「そうだ」

突然、斎さんが僕の方を向いた。

「？」

「拓海も一緒に来ない？」

×＊××＊××＊××＊××

そんなわけで、僕は飛行場にいた。

「いいんですか？突然」

「丁度テスト飛行する予定の機体を借りてきたから大丈夫！」

テスト飛行って・・・・。

斎さんが借りてきたのは横並びに二つ座席のある小型偵察機。

座席の裏には機械やコンピューターが積まれていた。

「はい、さっさと乗ってー」

急かされ左側の席に座る。

「しっかりシートベルトしてね」

斎さんが慣れた手つきでシートベルトを着け、

「行きます！」

ゆっくり機体が動き出し、上昇する。

「久しぶりに飛行機飛ばしたわ～」

いつもは翼ばかり使っているのか、飛行機を飛ばす斎さんは楽しそうだ。

穏やかに飛行機は学園の上空を進む。

「わぁ・・・！」

飛行機になんて数えるほどしか乗ったことがないから、僕は飽きることなく景色を見る。

「うわ・・・海だ！」

学園の西側にある海岸が遠くに見える。

「それじゃそろそろ・・・」

斎さんがボソッと呟いた・・・・・え？

その瞬間！

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

視界が一回転した。

「行くわよーっ！」

ほぼ直角に急上昇。

空の青が目に刺さる・・・・・！

「ちょっ・・・・斎さん・・・・っ・・・・何してっ・・・・！」

「アクロバット飛行」

サラッと言うけど・・・・・！

猛スピードで飛行機は急降下する。

目が回る・・・・・・っ。

「やっぱ気持ちいいわ～！」

斎さん・・・楽しそうだ。

僕はもうフラフラだ。

そのあと、斎さんは回転やらなんやら、ジェットコースター並の操縦をして飛行機は学園に戻った。

×＊×＊×＊×＊×

「・・・おい・・・大丈夫か？」

「う・・・那千さん・・・大丈夫・・・です・・・」

司令部に戻った僕は、パソコンの前でへばっていた。

「斎は？」

「まだ飛んでます」

「あ～・・・・ご愁傷さん」

明後日の方向を見て那千さんは合掌した。

「そういえば・・・・これを・・・」

ふと思い出してパソコンの画面を那千さんに見せた。

「・・・・！これは・・・」

シュミレーションの画面に踊るのは【ＷＩＮ】の文字。

自軍損害ナシ、撃破回数二十回。

「・・・俺の前でやってみてくれ」

そう言われ、もう一度シュミレーションを起動させる。

トロイの数は四体。全て大型。

自軍は歩兵が六十体と中型戦闘機が五機。

一台の戦闘機が三体のトロイに囲まれ、残りの一体は歩兵部隊の後ろに迫っている。

「お、最高レベル」

「え！？」

まさかのだった。

どう考えたって戦闘機が少なすぎる・・・・！

とりあえず囲まれている戦闘機を何とかしよう。

―十分後。

「あと一体・・・・」

軍の損害は今のところ無い。

「よし・・・・！」

飛行機を一機、トロイの視界に動かす。

トロイが飛行機の方を向いた。

その隙に歩兵を背後に回らせる。

そして、攻撃。

飛行機からも攻撃。

トロイはどちらを向いても銃撃にあう。

ついに、

「これで・・・終わりだっ！」

最後の一発。

それはトロイの急所を貫通して、トロイは石と化した。

【ＷＩＮ】

「・・・よくここまでやったな」

那千さんの感心したようなつぶやきが聞こえる。

「資料を借りたおかげです」

昨日僕は、ＤＶＤを見ながらトロイと部隊のデータを見比べた。

何回も、何回も。

そのおかげでトロイの動きは大体読めるようになっていた。

「よし、合格だな」

那千さんがポンと肩をたたく。

「・・・ふう」

とりあえず安心だ。

・・・そう思ったら、眠くなってきた。

視界がだんだん暗くなっていく。

×＊××＊××＊××＊××

・・・・あれ？

「・・・・・え！？」

日はもう沈んでいる。

どうやら僕は寝てしまっていたようだ。

「・・・・・うわぁ」

誰も居ないな・・・。

みんな帰ったのかなぁ？

僕も早く帰ろう。

ノートパソコンを片付け、荷物をまとめる。

そしてドアに向かったその時―。

―ピピピっ、ピピピっ

電子音が司令部に鳴り響いた。
振り返るとモニターが光っている。
暗い部屋に浮かび上がる文字は、
【Ｒｅｃｅｉｖｅｉｎｇ　ＵＮＫＮＯＷＮ】
どこからかの通信があったみたいだ。
出た方がいいのかな・・・・？
でも、送り主は・・・・。
「よし」
しばらく迷った末、僕はモニターに近づいた。
「あの～・・・・」
無音。
「あの！」
『お前は誰だ。見かけない顔だ』
若い男の声だった。

「僕は新入りの拓海＝エイリアスです」

『・・・お前は、平和を信じるか』

「は・・・・？」

『争いの無い、平和な日常を信じるか』

何を言ってるんだろう・・・？

答えない方がいいのか？

『信じるか』

問いかけは続く。

「・・・信じます。いつか、戦いの無い世界が来ると」

『そうか・・・期待通りだ』

「え？どういうこと・・・？」

無音。

「ちょっと！？」

通信が切れてしまった。

何だったんだ・・・？

しばらく待ってみても、通信はこない。
諦めて僕は、司令部を出た。
×＊××＊××＊××＊×
それは、隊にもだいぶ慣れてきたある日のことだった。
「それじゃ、いくわよ。第一問、初の対トロイ戦があった場所は？」
「第一大陸の南方、ミサ自治区」
「正解。第二問！」
今日は斎さんとテストをしていた。
「また正解・・・さすがね」
「いや、そんなことないよ」
「いやいや、ご謙遜を。そんじゃ次・・・」
『こちら大陸軍本部、こちら大陸軍本部』
けたたましいサイレンの音が鳴った。
『第三大陸北西の海上で大規模トロイ戦が発生。至急出動せよ』
「大規模戦・・・！？」

司令部の空気が変わった。
斎さんが格納庫に向かって走り出す。
僕はとりあえずモニターの前に移動した。
・・・けど。
「拓海！お前も出動だ！」
那千さんがそう言いながら司令部に駆け込んできた。
「は！？僕、戦えませんよ！？」
「バカ、ココで戦うんだよ」
那千さんは僕の頭を指差した。

Ｆｌｉｇｈｔ　４　未知からの問いかけ（後書き）

＊後書き劇場＊

竜騎「最近、拓海が忙しそうだな。補習じゃないよな？」

虎月「お前じゃあるまいし」

竜騎「うっわ、ひでー！いや、確かにその通りなんだが」

虎月「そこは否定しろよ・・・おい！」

竜騎「どした？・・・・って第一大陸でトロイの大規模戦！？」

虎月「大規模戦は・・・久しぶりだな」

二人は何も知りません。

そんなわけで第四話です。

謎の人（？）が出てきました。

そのうちハッキリ登場させます。

いよいよ次回は大規模戦です。

拓海は活躍できるのか！？

こうご期待！

Ｆｌｉｇｈｔ　５　北西の空、異常アリ（前書き）

＋前回までのお話

突然大陸の北西にトロイが現れた。

出動する斎を見送る拓海に、那千が声をかける・・・。

Ｒｅａｄｙ　Ｆｌｉｇｈｔ！↓

Ｆｌｉｇｈｔ　５　北西の空、異常アリ

『このまま北に十?進んでください』

「了解した！」

第三大陸北西で対トロイ大規模戦が発生した。

当然対トロイ戦闘部隊のツバサは出動するわけだけど・・・。

「本当に僕も・・・？」

何故か僕も、那千さんの操縦する偵察機に乗っていた。

「本当だ。これから拓海には、斎率いる小型機部隊を指揮してもらう」

「え！？」

冗談ですよね？

目線で那千さんにそう訴えかける。

でも・・・。

「だから本当だ。画面を見ろ」

言われて、画面を見るとトロイの生体反応がポツポツと現れ始めていた。

「現在確認できるトロイは五体。こちらの小型機は二十機と空兵は斎だけだ」

無線用のヘッドホンを渡された。

こうなったら・・・やるしかない！

僕は気合いを入れて、ヘッドホンを装置した。

「チャンネルはどこに合わせればいいですか？」

「１１０だ」

言われた通りにチャンネルを合わせたら、風を切る音が聞こえてきた。

深呼吸をして、声を出す。

「この部隊の指揮をする拓海＝エイリアスです。よろしくお願いします」

声が震える・・・緊張している。

少しの間の後、

『了解！お願いね、拓海！』

斎さんの明るい声が聞こえた。

少し気が楽になって、改めて気合いを入れ直す。

絶対に・・・成功させてやる！

「では、一から十号機までは北に五？。他はそのまま西に進んでください。空兵は北に、十m高度を上げながら進んで」

初めて出した指示だった。

それぞれの返事と共に、画面上の点が動き出す。

トロイは五体でVの字隊形を作っていた。

僕は、西の二体と正面―Vの字の先にいる、リーダー格の一体を倒し、東にいる二体をおびき寄せる作戦を立てた。

うまく行くかはわからない。

リーダー格のピンチに集まってくる―そんなトロイの習性を使った、ちょっとした賭だ。

『こちら一号機、トロイを確認。これより戦闘に入ります』

『十一号機、大型トロイと接触！戦闘開始！』

「トロイより高い場所から二機で頭を狙ってください。他は足。空兵は、トロイが動けなくなったら、直ぐに接近して！」

『わかったわ！』

そこで一旦、通信は途切れた。

「なかなかいい判断だった」

那千さんが少しだけ僕を見て、そう言ってくれた。

「ありがとうございます・・・」

でも、まだ不安でしかたない。

この判断は正しかったのか？

シュミレーションのように、失敗することは許されない。

こうして、命を賭けて戦う身になって、初めて感じることができた不安だった。

『こちら斎。西のトロイを二体撃破！』

生き生きとした声が聞こえてくる。

僕は一つ溜め息をついて、頭の中の考えを追い出した。

こんなこと、今考えても仕方ない。

とにかく、最善を尽くさないと。

「周りの様子は？」

『他にトロイの姿は無いわ。東に行く？』

「いや、大型の方へ行ってください」

『了解！みんな、行くわよ！』

画面上の点が動き出した。

さあ・・・この罠に、かかってくれ！

斎さん達は大型トロイに近づき、援護を始める。

さすがにリーダーとだけあって、トロイは一向に弱った様子を見せない。

辺りの生態反応も無い。

失敗した・・・？

そう諦めかけた、その時。

『東方にトロイ確認！二体です！』

画面上に新たな点が現れる。

「来た！」

かかった！

東のトロイは小型だから、斎さん一人で充分倒せる。

「斎さん、小型を攻撃して！」

『任せて！』

心強い返事が聞こえてすぐ、斎さんが凄いスピードで動いた。

瞬く間にトロイの後ろに回り込み、続けざまに三発銃を撃つ。

トロイの羽が動かなくなる。

『行っけぇぇぇ！』

その隙に、光線がトロイの腹を貫いた。

――・・・！

無線を通して、トロイの叫びが聞こえてくる。

×＊××＊××＊××＊×

『小型二体、撃破！大型に向かいます』

「斎、またスピードを上げたな」

那千さんが面白そうに笑いながら言った。

「確かに・・・速くなりましたね」

「きっと前に拓海に『時間がかかりすぎ』って言われたこと、気にしてたんだぜ」

「はあ・・・」

そういうモノなのかなぁ・・・？

気を取り直して画面を見ると、大型トロイの周りには部隊の全てが集まっていた。

トロイの増援が来る気配もない。

なら・・・。

「一号機と十号機、派手に動き回ってトロイの目を引きつけてください。他は隊形を作って待機。斎さん」

『何？』

「隙を見て、トロイの懐に入ってください」

『・・・言われなくても！』

無線から「了解」の返事が聞こえてきた。

僕は大きく息を吸い込んで・・・。

「作戦、開始！」

僕の合図でそれぞれが動き出す。

・・・不思議と胸が高鳴っている。

この感じは何と言ったら良いのか？

強いて言うなら、興奮。

人を動かすと言うことに、僕はこの上ない興奮を覚えていた。

トロイの周りでは、指示通り飛行機が右に左に、トロイの目を撹乱させていた。

だんだんトロイの反応速度は遅くなっていく。

あと少し・・・あと少しだ！

ついに、

「今だ！」

トロイの動きが明らかに止まった瞬間があった。

斎さんは迷わず翼を広げ、トロイの懐に入り込み、

『これで終わりよ！』

銃がトロイの腹をとらえ、光線が貫いた。

静寂。

無線からの風が吹く音だけが響く。
長く思えた時間のあと、
―・・・・！
トロイは石となって青い空に砕けた。
『トロイ撃破確認！作戦成功です！』
「よくやった！初めてにしては上出来だ」
無線や那千さんからの誉める言葉は何も耳に入らない。
ただ、呆然としていた。
僕が・・・勝った？
「・・・あ・・・」
「どうした？」
那千さんの問いかけにゆっくり首を横に振る。
何でもないです。
と言うように。
僕は無言で【翼】を求めた。

どうしてか、この喜びを一番に伝えたかったから。

那千さんは何も言わず、無線を繋いでくれた。

『お疲れ、拓海』

『うん・・・お疲れ様、斎さん』

『・・・どうだった？今日の私の戦い・・・』

小さな声で尋ねてくる。

この前の僕の言葉、本当に気にしてたんだ。

そう思うと、何かおかしくて、

「大丈夫。文句なしの合格だよ・・・」

僕は笑いながらそう答えた。

×＊××＊××＊××＊×

この第三大陸北西でのトロイとの戦いは、大陸軍の勝利に終わった。

僕は司令官としての功績を認められて、ホントに少しだけだけど報奨金を貰った。

それは嬉しいんだけど・・・僕は思った。

本当にこのままでいいのか？

もし、トロイが力をつけたら・・・・？

人間と同じように、武器を持ったら・・・・？

もし、本当にそうなったら、今の僕の力では何もできない。

「もっと・・・力をつけないと・・・」

航空科の屋上で夕暮れの空を見上げながら僕はつぶやいた。

「そうだね。あんたは、もっと強くならないと」

「！？」

独り言に答える声があった。

声のする方を見れば、金髪の僕と同じくらいの歳の男子が立っていた。

制服は・・・航空科の物だ。

「あんたはまだ俺に勝てない・・・【翼】を手に入れられるのは、この俺だよ」

「君は・・・誰なんだ・・・？」

何で翼を―斎さんを知っている！

「俺は、時狗（じく）＝ルシアン。第二大陸から来た、司令官だよ」

Ｆｌｉｇｈｔ　５　北西の空、異常アリ（後書き）

＊後書き劇場＊

璃亜「いや～。よかったよ、無事に勝てて」

??「あの司令官も中々やるけど・・・甘いね」

璃亜「そうかい？拓海は頑張ったと思うよ・・・・ってあんた誰だい！？」

??「やっと気づいたの、整備士のお姉さん」

璃亜「いや、質問に答えなよ！」

さぁ。この謎の人は誰なのか・・・！

・・・はい。バレバレですね。

そんなわけで第五話でした。

「拓海の　レベルが　１　上がった」

今回の話はそんな感じですね。

そして最後に新しいキャラが出てきました。

次回からは新章ということで、気分も新たに頑張りたいと思います。

ぜひよろしくお願いします！

Ｆｌｉｇｈｔ　６　第二大陸からの訪問者（前書き）

＊前回までのあらすじ

無事、初任務を終えた拓海。

平和な日常を過ごしている彼の前に謎の人物が現れた！

Ｒｅａｄｙ　Ｆｌｉｇｈｔ！↓

Ｆｌｉｇｈｔ　６　第二大陸からの訪問者

「俺は、時狗（じく）＝ルシアン。第二大陸から来た、司令官だよ」

金髪の時狗という少年は、僕を見て笑いながら言った。

冷たい笑顔が怖い……。

「あんたが、一般人から司令官になったって噂の拓海＝エイリアスか……意外と普通だな」

「君は、何でここに？」

「決まっているだろう。【翼】を手に入れに来たんだ」

だから何でそれを……？

「世界の最新技術が全て詰まった空兵という存在。第三大陸だけのモノにしておくのは惜しい」

「目的は技術なの……？」

少し安心してしまう自分がいた。

何で？

何で、安心してるんだろう？

「……まぁ、斎＝フィレンチェにも興味はあるけど。結構可愛いし」

「かわっ……！？」

やっぱりモヤモヤする！

「そんなわけで、拓海、司令部に連れてってよ」

×＊×＊×＊×＊×＊×

司令部には那千と斎がいて、画面を前に話し合っていた。

「那千さん、斎さ……」

僕の呼びかけは途中で途切れた。

「君が斎さん？俺は時狗っていうんだ、よろしく」

「え……？え……！？」

時狗さんが凄いスピードで斎に近寄り、手を握って自己紹介しているから。

「那千さん……」

「誰だコイツ……全然動きが見えなかったぞ！」

斎さんもいつの間にか近くにいた時狗さんに、戸惑いを隠せないようだ。

「第二大陸から来た司令官みたいです」

「司令官？聞いてないぞ」

「だって、俺勝手に来たからね」

時狗さんが斎さんの手を放しながら、会話に入ってきた。

「こう見えても、後先考えずに行動するタイプだから。でも安心して、さっき許可は取れた」

小型端末の画面を見せられる。

【いいよ】

これだけ書かれていた……適当！？

「……上が良いなら良いけどよ。とりあえず司令官は無理だな」

「何で？拓海がいるからか？」

「へ？」

いきなり自分の名前が出てきて驚く。

「そうだ。このツバサに司令官は拓海一人でいい……パイロットでもやってくれ」

「那千さん……」

僕のことを信用してくれてる……！

「そっ…そうよ。司令官は拓海で十分よ」
時狗さんから十分な距離を取りながら、斎さんもそう言ってくれた。
嬉しい！
でも時狗さんは、
「そんなら、俺と拓海、どっちが司令官に向いてるか勝負させてもらおう」
諦めてなかった。
「勝負に勝った方がツバサの司令官になれる。負けた方は雑用に降格だ」
「おいっ…そんな勝手に！」
那千さんが止めようとするけど、時狗さんは話すのを止めない。
「ついでに…勝った方は、斎さんを自分のモノにできるとか」
何……だって…！？
「ちょっと勝手に…！」
何だって！？
気がつくと僕は勢いよく、机を叩いていた。

バンっ！

斎さんの肩が跳ねる。

時狗さんと那千さんがゆっくりと僕を見る。

「その勝負……受けて立ちます！」

「は！？」

「拓海まで……！？」

「そうこなくっちゃね」

僕は時狗さんを睨みつけ、

「斎さんは……渡さない！」

そう啖呵をきった。

沈黙。

「おい……拓海？」

それを破ったのは、那千さんの戸惑いの声だった。

「あ……」

斎さんは顔を真っ赤にしている。

どうしたんだろう？

「ふーん、へぇ。そういうことね」

時狗さんのニヤニヤ笑いを見て、僕はさっきの発言を思い出した。

『斎さんは……渡さない！』

これって……！？

まるで……。

「いやあのその違う……いや違わないけどえーと…あ～～！」

「落ち着け」

那千さんに頭を小突かれ、我にかえる。

「何でもいいけど、決定だね」

「だから勝手に……！」

こうして僕と時狗さんの戦いは幕を開けた。

×＊××＊××＊××＊××

「えーと……斎さん？」

時狗さんが司令部を出て行ったあと、僕は冷静になるために屋上に出ていた。

ボーッとしていたら、扉が開いて、振り向いたら斎さんがいた。

「……」

「あの～……ごめんね」

とりあえず謝っておいた。

変な事言っちゃったからなぁ。

斎さんは無言。

「え～と……」

「……って……！」

「え？」

斎さんが俯きながら何かを言っている。

聞こえないよ！

「だからっ……がんばって！」

「はい！？」

何を、どれを！？

「だから、時狗って言う人との……」

「あぁあれ……ってがんばれって！？」

「時狗って人が司令官になるのは……なんか嫌。あの人どうも苦手なのよ。そんなわけで、絶対勝ってよね！」

「あ……うん」

斎さんはそれだけ言って、校舎に戻ってしまった。

……あぁそういうこと。

……。

よし、頑張るぞー。

不思議とやる気がでてきた僕は、気合いを入れて校舎に戻ろうとして、

「何すれば良いんだろう？」

そんなことを思った。

×＊××＊××＊××＊××

次の日。

「どうも、斎さん」

「来た……」

時狗さんは司令部に現れた。

「何か用」

「そんなに不機嫌にならなくても……。拓海、対決の内容が決まったぜ」

「え！？」

思わず僕は立ち上がった。

時狗さんは僕の前に紙束を置きながら、

「模擬戦をやる」

そう言った。

Ｆｌｉｇｈｔ　６　第二大陸からの訪問者（後書き）

＋後書き劇場＋

那千「まったく……あの時狗ってヤツ、勝手なことしやがって」

璃亜「拓海もまさかＯＫ出すとはねぇ」

那千「まぁ……面白そうだから許す！」

璃亜「あんたそれでいいの……？」

那千はこう見えてその場のノリで生きる人。

そんなわけで大晦日にまさかの更新です。

いつもより短めです。

今回からは新章ということで青春させていきたいです（笑）

それでは良いお年を！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8550y/

空を翔るツバサ

2011年12月31日16時56分発行